

富士のさと人通信

発行所

(独) 国立青少年教育振興機構
国立中央青少年交流の家
電話：0550-89-2020
メール：fujinosato@niye.go.jp

「子どものため」を考える2日間

「富士のさと ボランティア養成セミナー」を実施



遠藤教授の講義にてグループワークに励む参加者

交流の家は、六月一三日（土）～一四日（日）で「富士のさと ボランティア養成セミナー」を開催した。本事業は、国立青少年教育振興機構が定める「法人ボランティア制度」のカリキュラムに基づ

き、青少年の体験活動を支援するボランティアに必要な知識・技能の習得と、活動への意欲向上を目的とするものである。当日は高校生一五名、大学生三一名、社会人二名の計四八名が参加した。「子どものためってなんだろう？」をテーマに掲げ、指導者やキャンプリーダーとしての心構えを学んだ。藤原一成所長や、常葉大学短期大学部保育科の遠藤知里教授による講義のほか、たき火や野外炊事の実践を通じ、参加者は多角的な視点からテーマに向き合った。事後アンケートでは「現実的な課題を考える貴重な機会になった」「子どもの成長だけでなく、周囲の仲間の成

長も実感でき、非常にやりがいを感じた」といった声が多く寄せられた。本事業の参加者は、今後開催される当所の主催事業や利用団体への指導等の現場で活躍する予定だ。



野外炊事の演習では、子供たちへの指示を想定しながらカレーライス作りに取り組んだ

「もしも」を学ぶ「富士のさと 防災・減災教育キャンプ」を実施

交流の家は、七月二一日（土）～二二日（日）で、陸上自衛隊滝ヶ原駐屯地と連携して、「富士のさと 防災・減災教育キャンプ」を実施した。本事業は、「もしも災害が起こったら」という状況を想定した被災生

活体験を通して、自助・共助・公助について学び、災害時に自分や周囲の人と助け合いながら行動できる力を育むことを目的に開催した。小学四～六年生四〇名が参加した。一日目は、自衛隊講話や災害時の対応について学び、テント設営や飲み水の確保などに取り組み組んだ。夜には電気と水道が使えない状況を設定し、各家庭で持参した非常食を食べながら、限られた物資の中で生活し、被災した時の生活を体験した。二日目は、非常食の朝食体験や火起こし、水を極力使わない防災カレーライス



電気と水が使用できない状況下で、各自準備してきた非常食を紹介する参加者

づくりを通して、災害時に役立つ知識や技術を学んだ。参加者は、災害への備えや助け合いの大切さを体験的に学び、防災についての理解を深めた。

【PR】

公式「Instagram」で日々の情報を発信しています。ぜひフォローしてください！



「交流の家の統計」

令和7年度利用者数

宿泊利用：92,254名

日帰り利用：29,111名

合計：121,365名

たくさんのご利用、

ありがとうございました！